

## 広報ただみ診療所

認知症をどう理解するか②

朝日診療所 医師

やまなみ ひろあき  
山並 寛明



朝日診療所医師の山並です。1月に引き続いて認知症の話です。

前は「認知症」は障害であり、脳の機能が衰えても生活の支障を減らすようなサポートで暮らせること、「認知症」のレッテルがかえって本人が落ち込んだり、心理的な距離を抱かれたりする負の側面ばかりを生じないように注意が必要なことを述べました。今回はもう一歩進んで、認知症の人のトラブルを理解するための考え方をご紹介します。

例えば、認知症の身内が介護サービスの利用を拒んだとします。そんな時「認知症だから」と理解をあきらめ叱りつけるのは、本人を認知症として捉える負の側面だけが出ています。

認知症の人の行動は①脳の病気だけで決まるわけではなく、②元々の性格とこれまでの人生で形成された習慣や価値観、③置かれた環境、ほか④その日の体調などが関係します。先の例でいうと、①：脳の病気でいろいろ難しくなっていることは周囲から見ても確かにあるのですが、②：人によっては今まで簡単にできたことができなくなっている自分を認めるのにプライドが許さなかったり、あるいは他の人に世話してもらって迷惑をかけることを必要以上に遠慮したりします。ですので話し合いは十分に配慮した中で行う必要があります。③：勧める側から感じられるのが思いやりよりも責め立てるような口調だと、本人はますます頑なになるかもしれません（心の動きは通常、認知症では最後まで衰えません）。④：なお、今までサービスに通っていた人が急に行きたくないと言った場合には、体調面に変化がないかにも注意しましょう。改めて言われれば当たり前のことも多いかも知れません。こういった考えるコツを知ることは、本人のためだけでなく家族の負担軽減につながると思います。

本人を一番良く知るのは家族ですが、家族だけでは対応が難しい場合もあると思うので、そんなときは認知症対応を多く経験している地域包括ケアセンター（あさひヶ丘）や診療所の職員と一緒に考えます。いつでもご相談ください。

## 地域おこし協力隊として Vol.98

只見町教育振興協力隊

そうくら しおり  
宗倉 汐理



只見町に来て初めての冬を迎えました。今年は雪が少ないようで、内心雪道の運転や雪かきが不安だったので少しほっとしているところです。今回は、只見高校の山村留学生の寮で働き、素敵だな、すごいなと思ったことを紹介させてください。

私は生まれも育ちも神奈川で、4年ほどインドネシアにいた経験もありますが、こんな高校生なかなかいないぞ！と、とても感銘を受けました。自分の人生の先をよく見つめて進学先や就職先を考えたり、働くことに対し前向きな明るい気持ちを持ち、それをお互いに話し尊重したりする姿が、大人の前だからではなくごく自然と、私との会話や友達との会話でするってできたのです。（個人のことで詳しい内容は伏せますが、気になる方はぜひ山村留学生の3年生に話しかけてみてください！）

なぜこんなに立派なことがこの年で考えられるのか、私なりに考えてみました。それは一つ、地方と都会の違いにあるのかもしれませんが。都会はいろいろと物も揃って充実しているかもしれませんが、人も多いためあまり学校関係以外の「仕事」や「働いている人」が身近ではありません。近くに農家さんやご飯屋さんをはじめ「働いている人」が声をかけてくださったり、生活に近い部分にあるのは只見ならではの感じます。そのため、自分の未来を描きやすいのかもしれませんが。

私は、いろいろな人と関わるからこそ、いろいろな道が見えてくると思います。近年は残念ながらコロナの影響で只見学習センターでの地域の人との交流はなかなかできていませんが、今後の情勢を見つつ、地域に開かれた学生寮の運営を考えていきたいと思っています。みなさま今後ともよろしく願いいたします。